

④「横浜トリエンナーレ」が3回も続くわけ—横浜らしさとは何か—

1 横浜トリエンナーレの果たす役割と「横浜らしさ」

クリエイティブシティ・ヨコハマのなかで、横浜トリエンナーレの果たす役割は何か。ひとつは、大規模な国際展

であることを生かし、「クリエイティブシティ・ヨコハマ」を内外に強力で発信すること、そしてもうひとつは、「市民が主導する文化芸術創造都市づくり」に貢献することである。

そして、横浜トリエンナーレが持つ「横浜らしさ」とはすなわち都心臨海部の魅力ある都市空間と、市民との協働である。この「横浜らしさ」を追求することが、クリエイティブシティ・ヨコハマをより効果的に発信し、市民主導の文化芸術創造都市づくりにつながると思われる。

①横浜トリエンナーレ2001 第1回の横浜トリエンナーレは、平成13年、国際交流基金・NHK・朝日新聞社・横浜市の4者により、日本での本格的な現代美術の国際展としてスタートした。全体テ

マは「メガ・ウェイブー新たな総合に向けて—」。(注1) 日本を代表する複合コンベンション施設、パシフィコ横浜

展示ホールと、まだオープンになっていなかった歴史的建造物、赤レンガ倉庫1号館をメイン会場に、屋外にも作品が展示された。9月2日から11月11日までの会期に35万人が来場。みなとみらいのホテル壁面に登場した巨大なバツタ(写真1)をご記憶の方も

多いのではないだろうか。このときのボランティアは約700名。会場や展示のスタッフとして活動していただいた。

このあと、平成16年1月に「クリエイティブシティ・ヨコハマ」の形成に向けた提言(注2)が出されるが、そのなかでトリエンナーレは「世界的な現代美術の中核イベントとして、クリエイティブ・コア(創造界隈)における活動と連携し横浜ならではの斬新な企画が望まれる」とされている。

②横浜トリエンナーレ2005 第2回の横浜トリエンナーレ(写真2)は1年遅れて平

成17年に開催された。会場を山下ふ頭に移し、2つの倉庫と中庭、さらに中華街など市内数か所にも展示が行われた。テーマは「アート・サカスー日常からの跳躍—」9月28日から12月18日の会期に19万人が来場したが、加えて「トリエンナーレサポーター」約1200名が作品の制作も含め様々なかたちで参加した。

国内外で多数のプロジェクトや展覧会に参加・発表している川俣正総合ディレクターの「ワーク・イン・プロダクト(展覧会は、運動態である)」というコンセプトのもと、作品や作家、あるいは展覧会そのものに市民が深く関わり、さらにトリエンナーレ学校のような企画が展開され、独自の広報グループ「はまこり」による活動なども含め、市民の力が大きく引き出されたのではないかと考える。こうした第2回展の展開は、横浜トリエンナーレの特色である「市民協働」をより明快に外部に向けて発信することになった。また、この回からBank ARTの連携企画「Ban

成17年に開催された。会場を山下ふ頭に移し、2つの倉庫と中庭、さらに中華街など市内数か所にも展示が行われた。テーマは「アート・サカスー日常からの跳躍—」9月28日から12月18日の会期に19万人が来場したが、加えて「トリエンナーレサポーター」約1200名が作品の制作も含め様々なかたちで参加した。

kART Life」が行われている。(注3)

2 横浜トリエンナーレ2008

そして今年、第3回「ヨコハマトリエンナーレ2008」(写真3)が開催される。9月13日から11月30日までの79日間、新港埠頭に新設される「新港ピア」会場を中心に、日本郵船海岸通倉庫(BankART Studio NYK)、赤レンガ倉庫1号館の他、三

溪園や大さん橋国際客船ターミナル、ランドマークプラザなど横浜を代表するスポットにも会場を拡げ、「タイムクレーヴァス(ときの裂け目)」をテーマに、多様な作品展示や

成17年に開催された。会場を山下ふ頭に移し、2つの倉庫と中庭、さらに中華街など市内数か所にも展示が行われた。テーマは「アート・サカスー日常からの跳躍—」9月28日から12月18日の会期に19万人が来場したが、加えて「トリエンナーレサポーター」約1200名が作品の制作も含め様々なかたちで参加した。



写真1 横浜トリエンナーレ2001 橋昇+室井尚「インセクトワールド飛蝗」

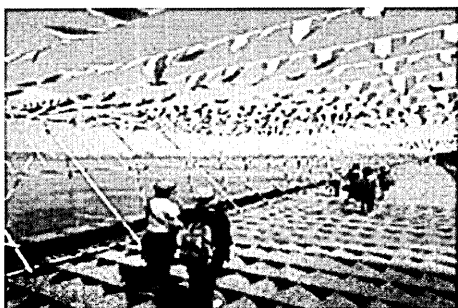


写真2 横浜トリエンナーレ2005 ダニエル・ビュラン「海辺の16,150の光彩」

執筆

野田 日文
齋藤 淳一

開港150周年・創造都市事業本部 創造都市推進課担当係長

(注1)

アーティストリック・ディレクターは河本信治(京都国立近代美術館主任研究官)、建昌哲(多摩美術大学教授、中村信夫(現代美術センターC A北九州ディレクター)、南条史生(インディペンデント・キュレーター) *肩書きはいずれも当時

(注2)

「1)都市構想を立案する意義」7頁(注9)参照

(注3)

「BankART Lie」については「(7)① BankART1929 はまこり」48・49頁参照

パフォーマンスが展開される。周囲のパブリックなスペースにも作品を設置し、横浜という港町全体の魅力をさらに深め、活気をあたえることが期待されている。

①市民のかかわり方

「横浜トリエンナーレ2008」においても、市民協働の重視、という理念は引き継がれており、広く市民と協働して展覧会を創りあげていこうという横浜市の姿勢に変わりはなく。

現在市民のかかわりは大きく次の4つのかたちで進められている。

・自主的な応援活動を行う「横浜トリエンナーレサポーター」

・会場運営等を補助する「ボランティアスタッフ」

・市民・NPOなどによる応援企画

・フリンジ活動（前の3つに属さない、周辺で行われる様々なイベント等）

横浜トリエンナーレサポーターは、昨年7月より活動を開始しており、現在250名弱の登録者がある。日本大通りの「ZAIM」を活動拠点とし、水沢総合ディレクターの命名した全体会議であるHOP会議（段階をへてSTE

P会議、JUMP会議に移行し、現在はJUMP会議の段階）の運営を行いながら、

・横浜トリエンナーレサポーターズニュース（フリーペーパー）の発行などを行う、「広報系」（写真4）

・「横浜トリエンナーレぐるり3会場ウォーク」の実施などを行う「イベント系」（写真5）

・他都市のボランティアスタッフとの交流などを行う「交流系」

・「アーカイブ・その他」などの自主的な応援活動を行っている。

ボランティアスタッフについては、今年の4月から募集を開始し、現在1,300名以上が会場運営や展示制作、教育プログラムなどの役割分担により準備を進めている。

「応援企画」とは、市民・NPOを対象に広く公募し、審査のうえ採択された企画のことで、市内外の様々な場所、様々な人々によりトリエンナーレを盛り上げていく。

そして、フリンジ活動においては2009年の開港150周年記念テーマイベントのアートプロデューサーでもある日比野克彦氏による同時開催周辺イベント「THE SEEDS TRIP」（注4）や「黄

金町バザール」（注5）、その間をつなぐ「BankART Life III」など、魅力的な市民協働型のイベントを含む様々な活動がまちなかで繰り広げられていく予定である。

②横浜トリエンナーレを100年続けていくために

2001年から今回の第3回展まで、横浜トリエンナーレは都心臨海部の魅力ある都市空間を中心に、様々な会場を展示・発表の空間としながら、市民と協働して進めてきた。「フリンジ」を含め、平成16年の提言どおり、「世界的な現代美術の中核イベントとして、創造界限における活動と連携し横浜ならではの斬新な企画」が進められてきている。また、前回のトリエンナーレに関わったスタッフのなか

に、そのまま横浜に定着して活動している者もでてきた。

こうした経緯を踏まえ、トリエンナーレの今後というところで、横浜トリエンナーレを100年続けていくためにはどうすればいいのかを考えてみると、ひとつは今まで述べてきた「横浜らしさ」を継続して追求していくこと、また、美術のファンというだけでなく、「トリエンナーレファン」を増やしていく、トリエン

ナーレを広く市民のイベントとしていくことが必要と思われる。

まずはより多くの市民にトリエンナーレに参加していただき、体験していただくこと、そして、広くまちなかに展開していくこと。その進んだ先に、新たな「横浜らしい」トリエンナーレが実現するのではないだろうか。

「注4」 山下ふ頭で行われる、実際に乗ることが出来る段ボール船づくりの公開ワークショップ。



写真4 サポーターズニュース

横浜トリエンナーレ 2008
YOKOHAMA TRIENNALE
TIME CREVASSE
9/13 - 11/30

写真3 横浜トリエンナーレ2008 チラシ



写真5 ぐるり3会場ウォーク：新港ふ頭